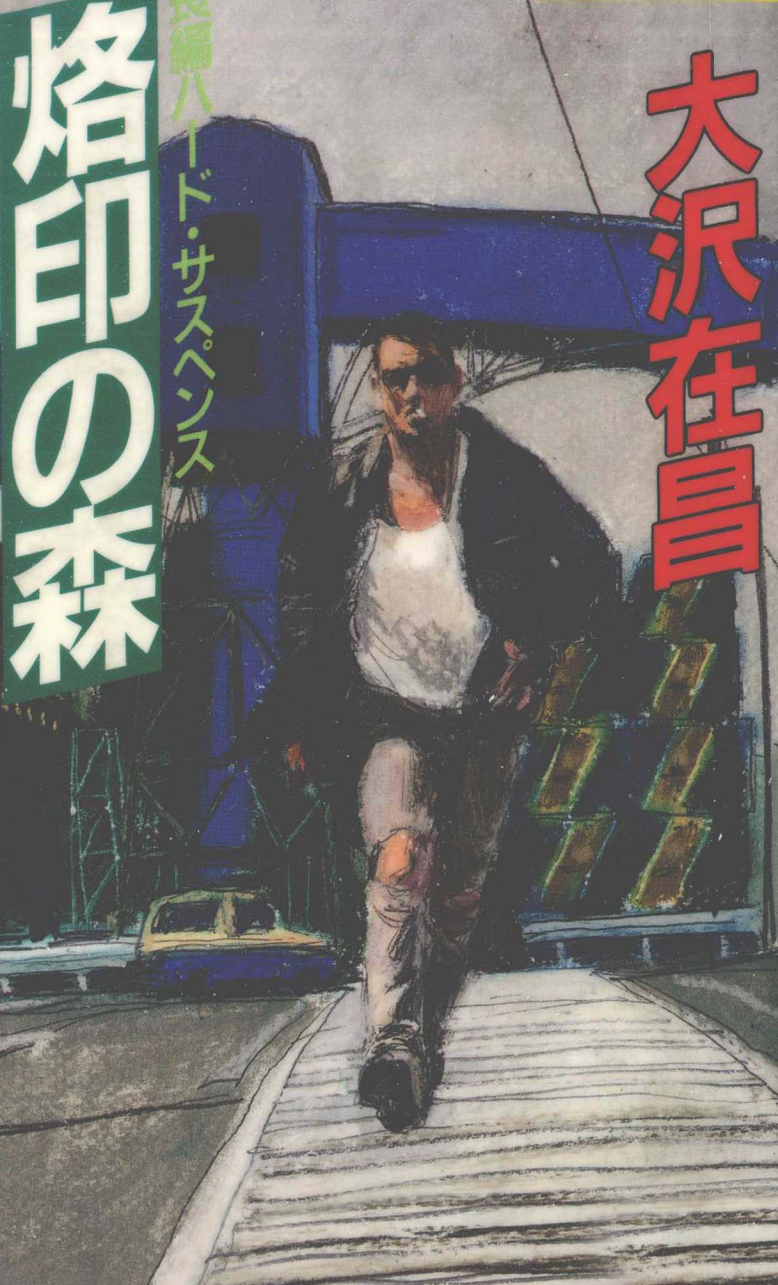


大沢在昌

文庫ハード・サスペンス

烙印の森



烙印の森

一九九五年一月二十五日

初版発行

著者 大 沢 在 昌

発行者 増 田 義 和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(三五六二)二〇五一(編集)
〇三(三三三五)四四四一(販売)

振替 〇〇二〇一六―三二六 下〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

梅田第一ビル内

TEL 〇六(三一一二)一五七三

印刷 大日本印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

ISBN4-408-50257-X

©A.Ohsawa 1995
Printed in Japan



JOY NOVELS

長編ハード・サスペンス

烙印の森

大沢在昌

実業之日本社

烙印の森

カバーイラスト／橋本清一
本文イラスト／河野治彦
装幀／サン・プランニング

五月にしてはひどく暑い。夜になって少しはやわらいだような気もするが、芝浦運河の黒い水面から瘴^{しょうき}気にも似た湿気がたちのぼり、開けはなった窓から入りこんで、じっとりと体にまつわりついてくる。

私は、明りを消した部屋の、窓に近いソファに腰かけて外を眺めていた。

運河の悪臭はそれほど気にならない。芝浦の埋立地の、運河の支流に囲まれた中州に建つマンションの八階からは、真夜中にさしかかろうという東京の、うずくまった巨獣のような風景が見える。

巨獣のさかだった毛先には、光を放つ寄生虫に似て、赤や緑、青などの煌^{きら}めきが点在している。

巨獣はまだ眠りについていない。複雑にからみあった毛の間を疾走する車の数、そしてエンジンの叫びに混じってかん高い悲鳴をあげるサイレンのこだまがそれを証明している。

私はアイスコーヒーの入った紙コップを手に、デスクの上のパーソナルコンピュータを見やった。
「福耳」がこしらえたものだ。

コンピュータの本体はデジタル無線機とつながっている。

二台の機械の中でおこなわれているのは、猛スピードの洗いだした。東京の空を、それこそ無数に飛ぶ電波の中から、ある周波数のものだけを特定し、しかもそれにかけられたデータ変換という形の「秘密パターン」を読みとって、意味のある音声に組み直す。

洗いだしに入ってから、三十分が経過していた。デジタル無線機のチャンネル表示が、コンピュータの指令を受けて、四つの窓の中で目にもとまらない

い速さで切り替わっている。

洗いだしは、数時間にも及ぶこともあれば、ものの数分で完了することもある。

パチンコ屋のデジタル台に似ている、といえなくもない。

洗いだしが成功すれば、壁ぎわにおいたスピーカーから自動的に音声流れだすはずだ。それまで私は、ただ待っている。

ぬるくなつたコーヒーをもうひと口飲み、再び窓の外に目を向けた。

窓の外に比べ、建物の中は静かだった。マンションとはいえ、テナントの大部分はオフィスだ。

青山や原宿の家賃高に見切りをつけた、あるいは追いだされたアパレルメーカー、通信販売専門のビデオプロダクション、高利貸し、デザイン事務所、などが入っている。

この建物の二十四時間を知っているのは、事務所兼住居として部屋を使う私のほかは、ほんの数人く

らいだろう。

窓の下を、非現実的なほどのまばゆい光を放つて、モノレールが通過した。

二十三時十分羽田発の、浜松町行き最終電車だ。

輝く四角い窓からは、旅に疲れ、スーツケースを膝の間にはさんだ乗客たちの姿が、かいま見える。

連中がこれから向かうのは、郊外に建つちっぽけな我が家か、それとも、この巨獣の体毛の一本である、箱のようなホテルの一室か。

モノレールは体をくねらす環虫類のように、毛先の間をくぐりぬけていく。

釣りエサに使うイソメ類のある種のは、発光体を備えている、と何かの本で読んだことがある。

たとえば、アオイソメだ。緑灰色をした、ミミズの親戚のような奴だが、夜釣りでは、海中で緑色の光を放ち、魚はそれを目あてに食いついてくるとい

う。
モノレールはそれに似ていた。

ちがうのは、乗っている連中が、誰も自分の体に鉤がつき刺さっているのに気がついていない点だ。

連中が魚なのか、エサなのか、本当のところは、私にもわからない。ただ、どちらにしても、いずれは、魚の口か、釣り人の手で、息絶える運命にある。そう、魚ならば、あるいは、釣り鉤にかけられることも、他の魚に食われることもなく、安閑な一生を終える可能性がある。

が、釣り具屋で売られている、ビニールパックに入ったイソメには、そんなチャンスはない。鉤に吊るされるか、海中で魚に食われるか、どちらにしてもろくなことはなさそうだ。

決まった。あんたたちはイソメだ。イソメの、足にも似た、あの細かな毛の一本一本に過ぎない。もっとも、俺もそうだがね。

胸のうちでつぶやいたとき、洗いだしが成功した。

「——より各移動、渋谷管内、発砲事件の通報。円

山町××番地、ホテル『アイ』。近い局どうぞ」

「渋谷八、渋谷駅前」

「警視庁了解。他にありませんか」

「警視三〇五、現場付近」

「警視庁了解。渋谷八、警視三〇五、現場へ。現場は円山町××番地、ホテル『アイ』。この三階客室から銃声らしき音、悲鳴を聞いたとの訴えで。従業員、トミタという男性より入電。至急現場で調査願いたい」

「渋谷八、了解」

「警視三〇五、了解」

「警視三〇九、現場急行中」

「警視三〇九、現場急行中、警視庁了解しました。

なお、現場付近ではサイレン、赤色灯は停止。渋谷八、警視三〇五、警視三〇九は到着後、各乗務員と協力。ひとり現場に入ることなく、間合いをとり、現場客室を包囲、受傷事故防止に留意の上、事件性の有無を最優先、調査一報されたい。

「警視庁から渋谷？」

「渋谷です、どうぞ」

「本件、一一〇番受付番号は一二三五。指令二十三日二十一分、担当キノシタです。なお、至急、専務幹部、および待機車輦派遣を願いたい」

「渋谷了解。担当タムラ。待機車輦一号、および専務幹部は渋谷十五にてP Sからすでに出向済みです」

「警視庁了解。なお、渋谷管内の事案、詳細判明するまで、通話統制を実施します。各局、了解されたい」

グッドタイミングだった。私は紙コップをおき、ソファから立った。

この時間なら、バイクよりも車の方がいい。カメラバッグをつかみ、部屋を出て、エレベータに向かう。

私は地下一階の駐車場におりと、そこに止めた四WDのワンボックスカーに乗りこんだ。助手席に

カメラバッグをおく。

運転席のうしろには、デスクの上にあったのと同じ、デジタル無線機とパーソナルコンピュータのキットが後部シートをつぶしてセットしてある。

この二組を手に入れるために、私は五百万以上の金を「福耳」に払ったのだ。デジタルの警察無線は、「秘話パターン」のために、同じ周波数帯を扱うデジタル無線機であっても、一般に販売されている民生用機種では解読が困難だ。

しかも警察無線の「秘話パターン」は毎日のように変更される。これをいきあたりばったりの手動でスイッチ切替えをおこなない、捜しあてるのは不可能に近い。いわば、億とあるテレビのチャンネルをひとつずつ回して、目あての一局を見つけよう、というのに似ている。

「福耳」は、それをコンピュータで自動的に回して捜しあてるソフトを開発したのだ。

それが具体的にはどんなメカニズムであるか、私

にもわからない。ただ、このキットを使えば、通常では決して傍受できない、警察無線を傍受することが可能になる。

車のエンジンをかけると、私はコンピュータと無線機の電源を入れた。部屋をとびだす前に、目に焼きつけておいた「秘話パターン」の番号を打ちこむ。

ワンボックスカーは、側面の窓をすべて厚い遮光シールでおおってある。この高価なキットの存在を、車外から気づかせないためだ。その上、盗難防止装置もセットしてあって、鍵穴に針金でもつつこもうものなら、とてつもない音量で警報ブザーが鳴りだすしくみだ。

車を駐車場から走りださせると、私は渋谷に向けてスピードをあげた。

信号で止まるたびに、カメラバッグを開け、中のカメラにフィルムが装填されているかを確認する。

円山町のホテルに着くまでに、無線機から流れだ

す情報で、私は現場の状況を把握していた。

警官が問題のホテル「アイ」三階の客室に踏みこむと、ダブルベッドの上に、上半身裸の男が仰むけに倒れていた。至近距離から喉と胸に二発、銃弾を浴び、死亡。男は、左手小指の先を欠損し、マル暴（暴力団員）風、とのことだ。

警官の要請を受け、警視庁の捜査一課が出勤していた。無線の内容から、担当が「鹿屋班」であることも、私は知った。

私の到着は、捜査一課よりも早かった。

現場は円山町のホテル街の一角で、すでにホテル「アイ」の前に止まっているパトカーに、野次馬の人だかりができていた。

私は細い一方通行路の片側に車を寄せて止め、カメラ二台を手を降りたった。

ホテル「アイ」は白塗りの、比較的新しい建物だった。現代風というか、やや子供じみた、メルヘンタッチの造りをしている。

救急車が、パトカー四台に混じって止まっていたが、動くようすはない。

明らかに犯罪の被害者と思^{おぼ}しき死者が確認された場合、救急隊員も死体には触れられない。おそらくひきあげるはずだ。

パトカーがホテル「アイ」の入口周辺を塞^{ふさ}ぎ、それをとり巻くように、十数人の野次馬の姿があった。

制服警官がふたり、緊張した表情で、入口前に立っている。

私は広角レンズをつけ、高感度フィルムを入れたカメラで、そこに近づきながら撮影を開始した。

まず野次馬の全員を、角度を変え、全員の顔がおさまるように撮影する。つづいて、ホテル「アイ」の周辺を撮りながら、捜査一課と、鑑識の車輛が到着するのを待った。

おそらく、先に現場に到着した警官たちも、殺人事件ということで、捜査一課の捜査員がつくまで、

手を出さずにいるだろう。

捜査一課の、グレイと白のセダン二台が到着したのは、私がついてからおよそ五分後だった。

グレイの後部席から、大柄でごま塩の髪を短く刈った、スリーピースの男が降りてくる。スリーピースはいつもと同じ紺だ。

この男が紺以外のスーツを着けている姿を、私は見たことがない。

白い手袋をはめながら六人の男たちを率いて、ホテル「アイ」に入ろうとする姿を、私はカメラにおさめた。

男はフラッシュに気づき、鋭い目でこちらを見た。額から左目の眼尻にかけて、白っぽい傷跡がある。

その傷がまだ生々しく血を噴きだしているところを、私は撮ったことがある。

一年二カ月前、情婦を一升壺で殴り殺したシャブ中の板前を逮捕するときに、柳刃包丁で切られたの

だ。

「どぶさらいか……」

男は口を曲げると吐きすてた。私はカメラをおろした。カメラを手にしたまま、うしろ向きに歩きながらいった。

「俺の方が早かったな、鹿屋班長」

「失せろ、といつても、ゴキブリにいうだけ無駄か」

鹿屋は低い声でいって、視線をホテルの入口に向けた。その目は、もう、完全に私を無視していた。

私は返事代わりに、そのうしろ姿を、野次馬も含めて、何枚か写真におさめた。

時間の経過とともに野次馬の数はふくれあがっていった。野次馬の大半が、このホテル街を訪れたアベックだった。

私は死体が運びだされるのを待ちながら、ときおり、そうしたアベックたちの姿をも写真におさめた。

中に、若い^{はたち}二十そこそこのカップルがいて、男の方が私に歩みよつてきた。

大学でラグビーかアメフトでもやっているのか、いい体つきをしている。娘の方はミニスカートをはき、とろんとした目つきだ。

「よう、おっさん、なんで俺たちの写真撮るんだよ」

野次馬が数人、ふりかえった。若者はジーンズにアロハシャツを着ている。

見張りの警官は、まるで聞こえなかったかのようにそっぽを向いていた。

「ふざけんなよ、フィルムだしな」

若者は右手をつきだした。痼癪^{かんしゃく}をおこした子供のような目つきをしている。

「悪いね、これも仕事なんだ。あんたたちの顔はでないようにするからさ」

私は首をふった。

「そんなこといってねえよ。フィルムだせつてんだ」

よ」

若者は居丈高いたけだかになつていった。今では野次馬の半数近くがこつちを見ている。

「わかつた。じゃあ、こつちで話そう」

私はいつて、若者を隣のホテルとの狭い路地に誘つた。

私の身長は百七十センチそこそこで、体重も七十キロに満たない。若者は暗い路地で、のしかかるように私を見おろした。

「なめんなよ、おっさん。痛い目あわしてやろうか」

私は無言で連れの娘を見た。娘の方は、若者に右手を預けるようにして、夜空を見あげている。仲裁はしてくれそうにない。

ガムをかむ動きが頬にあつた。

「犯罪現場の写真を専門に撮つてるんだ。アメリカにもいて、ブルース・ウィリアムズっていうんだけど知ってるかい？ けっこう有名だぜ」

私はいつて右手をポケットにさしこんだ。

「とぼけたこといつてんじゃねえよ。フィルムだせよ、早く」

「駄目かな、仕事なんだよ」

私は懇願するようにいつてみた。

若者は舌打ちしてあたりを見回した。太い左腕がさつとのびて、私の襟をつかんだ。

「だせつていつてんだろう、この野郎。怪我したいのかよ」

酒の匂いが息にかおつた。

「わかつた、わかつたから、殴らないでくれ。暴力には弱いんだ」

「じゃあだせよ」

若者は拳で私の肩を突いた。

私は息を吐いて、広角レンズをつけたカメラをとりあげた。カメラは二台とも、首から吊るしてある。

フィルムを巻きとり、カバーをもちあげた。指先

でフィルムをもちあげようとして、手がすべった。乾いた小さな音をたてて、フィルムがアスファルトの上に落ち、ころがった。

私の手がそれを追おうとしたとき、娘が裸足にはいたスニーカーの爪先でさっとそれを踏んづけた。

私は娘を見た。ガムをかむ頬に、今度は薄ら笑いがあつた。

私は手をひっこめた。

娘がかがみ、フィルムを拾いあげた。若者に手渡す。

若者はそれを掌に握りこみ、いった。

「バーカ」

そして娘の肩に手を回すと、くるりと背を向けて歩きだした。

私は彼らがホテル街を下る道を遠ざかっていくのを見届け、右手を開いた。

もう一本のフィルムがそこにあつた。

私が道に落としたのは、しゃべりながらポケット

からつかみだした、ダミーのフィルムだった。

つまらないトリックだが、カメラそのものを取りあげられない限り、たいていはこの手でごまかせる。

空のカメラに新しいフィルムを入れ、ホテル「アイ」の前まで戻った。

ちようど、係員の手で死体が運びだされるところだった。

死体は担架にのせられ、毛布でおおわれている。

私はカメラをもちあげ、写真を撮りまくった。

死体が運びこまれたのは、グレイのワゴンだった。このあと監察医務院に運ばれ、司法解剖を受けるのだ。

ワゴンは制服警官の誘導を受け、野次馬の群れをくぐって走りだした。

私は再びカメラをもちあげ、シャッターを押した。

ワゴンを見送る野次馬の列、まだホテルの入口を

のぞきこむ者、白っぽい顔つきで身をよせて話しあ
う近所の住人。

私のカメラは、周辺にいる人間すべてをレンズに
とらえ、フィルムにおさめた。

芝浦のマンションに戻ったのは、午前一時過ぎだった。駐車場に車を止め、私は八階に上がった。

リビングルームの隅に、古い大型の耐火金庫がある。この部屋の前の住人、電話や車を担保にして高利貸しをやっていた老人が出ていくとき、おいていったものだ。

老人は広島県出身で、商売を閉じ、故郷でひっそりと暮らす、といっていた。私はその老人と、「ポット」という飲み屋で知りあったのだ。

金庫に撮影ずみのフィルムをおさめた。たぶん私もこの部屋を出るとき、同じように金庫をおいていくにちがいない。

灰色の、ところどころ塗装のはげた金庫は、いか

にも古めかしく融通のきかない存在に見える。

作られたのは、三十年以上も前だろう。頑丈さだけがとりえて、どんなに体力がある泥棒も、この金庫だけは、かついでいく気持にはならないはずだ。

金庫の中に入っている品の大半は、これまでに撮影したフィルムのネガと、プリントの一部だ。

あとはわずかな書類、現金は一円も入っていない。

マンションは二DKで、そのダイニングともうひと部屋を、リビング兼事務所として使い、残るひと部屋を寝室にしている。ダイニングの一部は、家主に文句をいわれない範囲内で、現像室として使えるような改装を施してある。

バスルームに入り、シャワーを浴びた。撮ってきたフィルムを現像する気力は正直いってなかった。シャワーを浴び終えた私は、Tシャツとジーンズを着け、部屋をでた。

芝浦一帯が、ウォーターフロントとして脚光を浴